

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：37105

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370306

研究課題名(和文) 惑星思考の核批評 英語圏と日本の核文学の横断的考察

研究課題名(英文) Planetary and Nuclear Criticism: Cross Cultural Readings of Anglophone and Japanese Nuclear Literature

研究代表者

一谷 智子 (Ichitani, Tomoko)

西南学院大学・文学部・教授

研究者番号：70466647

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：現代社会は、環境問題をはじめ、貧困、テロ、戦争など、もはや国民国家の枠組みでは対応が困難なほどグローバル化した危機を抱えている。本研究は、そうしたグローバル・リスクの一つである(核兵器と原子力発電の両方を含む)核問題を描いたアメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリスを中心とする英語圏の文学と日本の文学を横断的に分析・考察することを通して、人類共通の危機を回避するための国や文化を越えた連帯の可能性と、持続可能な社会を構築するための地球規模の環境的想像力の意義を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Modern society involves a set of globalized crises including environmental issues, poverty, terrorism and wars, in which the conventional frame of the nation state cannot adequately cope. This study explores the possibility of building a sense of solidarity beyond national and cultural difference in order to confront the common crises facing humanity by examining both Anglophone (American, Australian, Canadian and English) and Japanese literature that present nuclear issues as part of a globalized crisis. An analysis of these texts will bring to light the significance of planetary thought and environmental imagination in constructing a sustainable world.

研究分野：英語圏文学・文化

キーワード：核批評 核の表象 原爆文学 オーストラリア先住民 カナダ先住民 エコ・コスモポリタニズム グローバル・リスク

1. 研究開始当初の背景

広島、長崎に次いで3度目の被ばく体験となる2011年の福島での原発事故は、原発と原発をつなぐ闇に目をむけさせ、核の問題との向き合い方を改めて日本の国民に問うものであった。ポスト冷戦時代を生きる私たちは、未だに軍事的・民間的核利用の浸透した「核文明」から逃れられない存在であり、世界中に散在する多数の核兵器への脅威に加え、原子力産業に伴うリスクと常に背中あわせの状況にある。福島の事故は、一旦大規模な事故が起こると放射能汚染による広範囲な人的・物理的被害や環境破壊をもたらされることを私たちに再認識させたが、原発事故に伴う被害が甚大なのは、核技術が本来、軍事技術として開発されたものであり、核兵器による攻撃と同様、放射能による無差別の被害を引き起こす可能性があるからである。この事故は、世界各国でも原発政策を見直す動きや反核運動へとつながり、核技術がもつリスクを再考する動きを促している。

文学・文化研究の歴史を振り返ると、冷戦時代後期において、核をめぐる言説が文学的課題として取り上げられるようになり、「核批評」(nuclear criticism)という新たな文学批評のジャンルが確立された。その背景には、レーガン政権の成立に伴うアメリカとソ連の軍拡競争の再激化と核戦争への脅威の増大、1978年のスリーマイル・アイランドと1986年のチェルノブイリでの相次ぐ原子力発電所の事故などがあつた。こうした「核の危機」を背景に、核問題に対する関心が世界規模で高まりを見せた時期、ジャック・デリダ(Jacques Derrida)を中心として、核批評は核戦争の論理と修辞に文学理論を適応させ、核技術が現代社会と文化に与える影響を広く考察することを目指して展開された。しかし、この核批評は、核兵器を使用したアメリカに集まった批評家の間で、西欧の論理的枠組みにおいて展開されたものであり、実際に核の攻撃にさらされた広島や長崎の視点が反映されたものではなかった。

一方、日本にも戦後より書き継がれてきた被爆体験があり、それは原発文学として一つのジャンルを成している。西洋の核批評や核文学が広島と長崎の不在に特徴づけられるのに対して、日本の原発をめぐる言説や原発文学は、広島と長崎を決して脱構築できない原点とし、「唯一の戦争被爆国」ということを立脚点として展開されてきた。ポスト冷戦、ポストフクシマという時代的背景において、こうした核をめぐる言説における学問的な流れを振り返り、西欧の核批評と日本の原発文学の限界を確認するとき、核の平和利用(原発)と軍事利用(核兵器)として区別される核技術とエネルギーをめぐる問題を包括的に考察する新たな核批評の構築が必要だといえる。それはいかにして可能かという問いを抱いたことが、本研究を行うに至った背景である。

2. 研究の目的

本研究は、英語圏と日本の文学作品を研究対象とし、環境批評(エコクリティシズム)の観点から、核の言説を考察することで、持続可能な社会を構築するための国や民族、文化を超えた連帯の可能性を探り、地球規模の環境的想像力の意義を明らかにすることを目的とするものである。

現代社会は、環境問題をはじめ、貧困、テロ、戦争など、もはや国民国家の枠組みでは対応が困難なほどグローバル化した危機を内包している。核兵器と原子力発電を含む核の諸問題は、このグローバル・リスクの最たるものであるが、本研究は、アメリカ主導のグローバリゼーション批判としてガヤトリ・スピヴァクが提唱した「惑星思考」という概念を援用しながら、1980年代に端を発する西欧と日本の核批評を乗り越える言説を紡ぎ出す作品群を文化横断的に考察することを目指す。

以上のような問題関心にに基づき、明らかにすべきより具体的な課題として、以下の点を設定した。

- (1) 文学的想像力と核をめぐる歴史の関わりを明らかにする。
- (2) 世界ではじめて原発を使用したアメリカの核をめぐる言説の変遷を考察し、研究対象とするテキストがどのように「原発神話」を脱構築しているかを考察する。
- (3) 核の問題を原発や原発だけに限らず、その原料となるウランの採掘の過程から捉え、採掘現場や核実験場での被ばくをも視野に入れ、その犠牲となってきたカナダやオーストラリア先住民といったマイノリティの経験とはいかなるもので、その経験に基づいてどのような核への批評性をもつ作品が生み出されているかを探る。
- (4) 日本の原発文学、さらには福島の事故後、災害(後)文学という新たな枠組みの中で、原発と原発を表裏一体のものとして捉える思潮のなかで生まれている文学作品の分析を通して、広島と長崎、更には福島の経験をグローバルな視点から捉える言説を省察する。

以上の4点の課題に取り組むことによって、従来の核批評を乗り越え、グローバル・リスクに対抗しうる新たな核批評の方向性を探ることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、といった広範囲にわたる英語圏の核をめぐる文学作品と日本の原発文学・災害文学を対象とし、上述の研究の目

的と課題を明らかにするために、以下のよう
に作品を選定し分析を行った。

- (1) 「原爆 (atomic bomb)」という言葉
を世界で初めて用い、核エネルギー
時代の到来とそれによる国民国家の
崩壊を描いたイギリスの H.G.Wells
の 1914 年の小説 *The World Set
Free* (『解放された世界』) の分析
を通して、SF としての本作の文学的
想像力が、のちの原爆製造の歴史や
原爆の攻撃にさらされた日本の戦後
の歩みに与えた影響を考察した。作
品の精読に加えて、ロンドン大学の
図書館の H.G.Wells コレクションに
て資料の収集と調査を行った。
- (2) アメリカの核をめぐる言説において
最も支配的である「原爆は戦争を早
く終わらせ、アメリカ国民をはじめ
とする多くの人々の命を救い、世界
の平和に貢献した」という原爆神話
や核の抑止力を肯定する言説を脱構
築するテキストとして、Pearl Buck
の 1959 年の小説 *Command the
Morning* (『神の火を制御せよ』)
と、1990 年代に捏造された原爆詩人
としてアメリカの文壇を騒がせた
Araki Yasusada の詩集 *Doubled
Flowering* (『二重の開花』) を選定
した。この二作品をアメリカの核を
めぐる言説の中に位置づけ、テキス
トの精読を通して、本作が創出する
「原爆神話」への特異なカウンタ
ー・ディスコースを分析した。
- (3) 核兵器や原子力発電の原料になるウ
ランの採掘場や核兵器の実験場の多
くは先住民の伝統的土地であること
が多い。かつての植民地主義や人種
差別との連続性において捉えられる
マイノリティの核をめぐる経験を考
察するために、カナダの先住民劇作
家 Marie Clements が先住民デネの土
地から採掘されたウランが広島と長
崎に投下されたという歴史を描いた
Burning Vision (『燃えゆく世界の未
来図』) (2002) と、オーストラリア
の先住民俳優 Trevor Jamieson と白人
劇作家 Scott Rankin が共同で脚本を
手がけ、イギリスによるオーストラ
リアでの核実験で被ばくした先住民
の経験を描いた *Ngapartji Ngapartji*
(『ナパジ・ナパジ』) (2005) を分析
対象作品として選定した。この二作
品がローカルな核の問題を描きなが
らも、グローバルな核の問題へと関
心を広げながら、広島と長崎への連
帯を見出している様を明らかにしよ
うとした。また、ウランの採掘とイ
ギリスの核実験によって先住民が二
重の核の被害にさらされてきた事実

を暴き出したセルビア系移民のオー
ストラリア作家 B. Wongar の核五部
作についても調査を行い、この作家
の作品をもとにオーストラリアと日
本の核問題をつなげて描こうとする
ニュージーランドの映像作家 John
Mandelburg の映画製作に関わった。

- (4) 日本の原爆文学の系譜において、唯
一の戦争被爆国であり、核の被害者
であるという言説への再考を促す作
品や、広島、長崎の延長線上に福島
を位置付けて核の問題と対峙しよ
うとする作品として小田実の
『HIROSHIMA』(1981)、林京子
の『長い時間をかけた人間の経験』
(2000)、津島佑子『ヤマネコ・ド
ーム』(2013)の三作品を選定し、そ
れぞれの作品が、冷戦期、ポスト冷
戦期、ポストフクシマの時代にあっ
て、日本の被ばく体験をいかにグロ
ーバルな視野の中に位置づけ、グロ
ーバル・リスクとしての核の問題を
描き出しているかを考察した。

4. 研究成果

2. の欄であげた (1) から (4) までの
4 つの具体的な研究課題について明らかにし
た内容は以下の通りである。

(1) 原子力時代の始まりは、アメリカのニ
ュー・メキシコ州トリニティ・サイトでの核
実験と広島・長崎への原爆投下が行われた
1945 年とされる。その元となる核開発プロ
ジェクト、マンハッタン計画が動き始めるの
が 1942 年であったことは、周知の事実であ
ろう。しかし、「原子爆弾」という用語の初
出は、これらの歴史に先駆けることおよそ
30 年、第一次世界大戦の勃発した 1914 年
であったことはあまり知られていない。この語
を始めて用いたイギリスの小説家 H.G.Wells
の 1914 年の小説 *The World Set Free* (『解
放された世界』) には、民事利用から軍事利
用に至るまで、原子力エネルギーによって支
配された世界の様子が克明に描かれている
が、当時、原子さらには原子エネルギーにつ
いてはほとんど明らかにされてはおらず、本
作に描かれた原子核の分裂や核兵器への転用
の方法はまだ確認されてはいなかった。単
なる空想科学小説の域を超えて、世界ではじめ
て描かれた核・原爆小説として、のちの原爆
開発に関わる科学者にも影響を与えた本作
は、これまでウェルズ研究の中ではほとんど
取り上げられず、核文学研究の中でも忘れ去
られた一冊となってきた。本研究は、本作の
精読を行い、第一次世界大戦後、戦争を根絶
するために国際連盟の樹立を提唱し、戦争に
より自滅の道から人類を救う唯一の方法とし
て「世界国家」の思想を説き続けたウェルズ
の平和構想の青写真となったのが、この *The
World Set Free* であることを明らかにした。

この文学的想像力が生み出した原爆は、マンハッタン計画で原爆の開発に重要な役割を担ったハンガリー系ユダヤ人物理学者レオ・シラードを介して、原子爆弾の出現を現実のものとする引き金になったが、現実にも生み出された原爆は、ウェルズが原爆の表象に込めた意図を置き去りにして実現してしまった。だが、ウェルズが原爆に込めた意図とは何だったのか？ウェルズは戦争を繰り返す人類の旧体制を乗り越え、世界政府と新世界秩序を実現させるための起爆剤として、原爆を小説に描いた。それは逆説的ではあるが、原爆が決して実現しないための、言い換えれば、科学が人類を追い越してしまうことによって起こる破局を回避するためのアレゴリーであったことを本研究は明らかにした。さらには、現実のものとなった原爆を広島と長崎において経験した日本の知識人たちの世界連邦の形成に向けた運動にウェルズの平和構想が受け継がれたことをも確認することができた。文学的想像力と核の問題の密接な関わりを裏付け、超国家的機構の必要性和実現の可能性を探る貴重な作品として、本作品を再評価した。

(2) Pearl Buck の 1959 年の小説 *Command the Morning* (『神の火を制御せよ』) と 1990 年代に捏造された原爆詩人としてアメリカの文壇を騒がせた Araki Yasusada の詩集 *Doubled Flowering* (『二重の開花』) は、原爆を主題とし共に注目を集めながらも、日本ではほとんど知られておらず、これまで十分な研究がなされてきたとは言い難い

(*Command the Morning* は、2007 年になるまで日本語に翻訳されず、Araki Yasusada は無名に近い)。本研究では、冷静期とポスト冷戦期という、時代背景こそ異なるが共通してアメリカの「原爆神話」に一石を投じることとなった二作品の精読を通して、これらの作品がいかに原爆投下を正当化する言説を脱構築し、国家という枠組みを超えた広い視野からの核批評を可能にしているかを明らかにした。

Pearl Buck の *Command the Morning* は、1940 年に米国政府が始動した「マンハッタン計画」の史実をもとに描いた原爆を製造した科学者たちの物語である。本作には、実際にこの計画に参加していた科学者と思われる男性科学者たちに加えて、史実には現れない架空の女性科学者が登場する。本作はジェンダーの視点を導入し、もし、女性の科学者であれば、敵国の市民を無差別に攻撃しうる原爆を製造し、実際に使用するというジレンマにどう対処するかを描いている。さらには、日本人やインド人などアジアを中心として、敵国であった人種的少数者の生をも描き、「他者」の視点に立った原爆投下の是非を問う本作品の独自性とグローバル性を指摘した。また、タイトルの「暁」には、日本の帝国主義を喚起する日章旗のイメージや、原爆、さらには太陽そのものが重ねられ、重層

的な意味を持つ。核エネルギーから太陽（自然）エネルギーへの移行を示唆する本作のエンディングを考慮するならば、本作は原爆使用の非人道性を問うだけでなく、自然環境への意識をも喚起する包括的な核批評を内包していることを明らかにした。

ヤササダのテキストが原爆を描いた他の作品と大きく異なるのは、広島と長崎の被爆者というふれこみで流通させた作品の虚構性が明らかになるプロセスを組み込むことで、まずアメリカの他者への欲望を暴いた点にある。そして、ホークスという手段を用いることで、「他者性」において「自己」を想像するという「自己」と「他者」の相互浸透性のうちに創作を試みている点も従来の作品とは大きく異なる。こうした境界を横断する実験的なヒロシマへのアプローチは、一旦使用されれば、敵を破壊すると同時に、攻撃を仕掛けた側も破壊される自己言及的兵器である核兵器によって作り出されている敗者と勝者の区別のない絶対的な全体性（グローバル・リスク）に晒されている私たちの存在性を前景化することに成功しており、原爆神話を超える新たな核批評となりえていることを論証した。

(3) 原爆や原発をめぐる核の問題は、その原料となるウランの採掘の過程から生じている。採掘現場での汚染の問題や核実験場での被ばくをも視野入れ、その犠牲となってきたカナダやオーストラリア先住民といったマイノリティの経験について描いた作品について調査を行った。カナダでもオーストラリアでも、核被害は長い間政府の機密事項だったこともあり、この問題を捉えた資料は少なく、文学作品も少ない。カナダの先住民劇作家 Marie Clements の *Burning Vision*(2002)、オーストラリアの先住民俳優 Trevor Jamieson と白人劇作家 Scott Rankin が共同で脚本を手がけた *Ngapartji Ngapartji*(2005)、セルビアからの移民作家でいち早くオーストラリアの核の問題を、文学を通して告発してきた Wongar の核をめぐる五部作は、先住民側からの被ばく経験を語った貴重な作品であるといえる。

カナダ政府が原爆の製造に関わったという史実はあまり知られていないが、アメリカ大統領のフランクリン・ルーズベルトとイギリス首相のウィンストン・チャーチルによって調印され、両国間の原子爆弾に関わる計画を取り決めた一九四三年のケベック協定

(Quebec Agreement) は、カナダがマンハッタン計画のためのウランを提供する内容を含んでいた。先住民デネが伝統的に居住してきたノースウエスト準州に位置するグレート・ベア湖畔の鉱山ポート・ラジウムで採掘されたウランが、アメリカのニュー・メキシコ州ロス・アラモスへ運ばれ、日本の広島と長崎を破壊した原子爆弾に使用された史実は *Burning Vision* は描いている。

オーストラリアでは、1952 年から 1957 年までの間に、イギリスによる合計 12 回の核

実験が行われた。実験場となった西オーストラリアのモンテ・ペロ諸島、中南部の砂漠地帯のエミューとマラリングには、先住民アボリジニの居住地が含まれていた。さらにオーストラリアは、ウラン推定埋蔵量が世界1位のウラン産出国であり、日本をはじめ世界各国に原子力発電ウランを提供してきたが、このウラン鉱山も先住民の伝統的な土地に位置していることから、先住民部族社会は、核実験に加えて、ウラン鉱山の開発と採掘による環境汚染という二重の被害にさらされてきたという歴史がある。演劇 *Ngapartji Ngapartji* と *Wongar* の小説五分作と彼の作品の映画プロジェクトは、この史実を描き出したものである。

これらの作品群は共通して核が部族社会や地球環境にもたらす影響を取り上げ、原爆による破壊を経験した日本の広島・長崎と自らの被曝体験を結びつけ、国や地域を越えて越境する場所の感覚と連帯の空間を描き出している。自国の核被害に焦点を当てながら、グローバルな核の問題へと意識を広げたこれらの作品は、地域主義と地球主義（コスモポリタニズム）が融合した作品であるということがいえる。これらの作品群に見出せる地球主義は、ウルズラ・ハイザ(Ursula K. Heise)が主張する「エコ・コスモポリタニズム(ecocosmopolitanism)」という概念を通して分析することができる。

『場所の感覚と惑星の感覚-グローバルな環境的想像力』(Sense of Place and Sense of Planet, 2008)において、ハイザはローカルとの日常的な交渉によって獲得される「場所の感覚」と地球規模の環境意識を通して獲得される「惑星の感覚」の接続の可能性を探ることで、エコ・コスモポリタニズムという概念を提唱した。この概念が生み出される契機を与えたのは、ドイツの社会学者ウルリッヒ・ベック(Ulrich Beck)の「社会リスク理論(world risk theory)」であったことは特筆に値する。1986年のチェルノブイリ原発事故を背景に展開された議論において、ベックが環境問題をはじめ、貧困、テロ、戦争を含む政治的抗争は、もはや国民国家の枠組みでは対応が困難であることを指摘し、グローバル化したリスクを抱える現代社会を「世界リスク社会」と名付けたことはよく知られている。ベックは、こうした世界リスクゆえに生まれる超国家的な視点と協力体制について指摘した。ベックの議論に影響されたハイザの「エコ・コスモポリタニズム」という概念は、ローカルな地域社会における環境危機の経験を、人間と人間以外の存在すべてを包含する惑星の感覚へとつなげる思想である。コスモポリタニズムをめぐるのは、多くの議論がなされており、中産階級や知識人などの特権階級に属する者の経験や、植民地主義との共犯関係を有する思想として批判されることもある。しかし、ハイザがいうエコクリティシズムに接続されたコスモポリタニズムの特

徴と意義は、環境問題を少数者の視点から捉え直そうとする環境正義をグローバル・リスクへ向けた意識へと連結しようとする点にこそある。本研究では、ハイザの概念を援用しつつ、カナダやオーストラリア先住民が経験した核被害を環境正義の視点からのみ語るのではなく、その経験をグローバルな連関の中に位置づけることを試みた作品群には、エコ・コスモポリタニズムが見出せることを明らかにした。

(4) 日本の原爆文学からは、小田実『HIROSHIMA』(1981)、林京子『長い時間をかけた人間の経験』(2000)、津島佑子『ヤマネコ・ドーム』(2013)の三作品を分析した。小田の『HIROSHIMA』は、地球上初の原爆実験を行った米国南部のカウボーイが、対日戦闘機乗員となり撃墜、捕虜となって広島で被爆する様や、被差別下の朝鮮人、日系アメリカ人らの被爆をも描いており、加害が被害に、被害が加害ともなる錯綜した現代史の闇部を抉る作品である。

林京子の『長い時間をかけた人間の経験』に収められた短編「トリニティからトリニティへ」は、長崎の被爆者である林が、世界で初めて核実験が行われたロス・アラモスへ旅し、被爆した大地との交感を行うことで、被爆者意識が揺らぐ感覚を描き、人間中心主義を脱する核への批評の地平を切り開いている。

津島の『ヤマネコ・ドーム』は、原爆の被害を受けた日本が、なぜ3度目の被曝、福島の原発事故を引き起こすことを許してしまったのかという問題を戦後駐在米軍と日本人女性の間生まれた混血の子供達や、シングルマザーとその子供達といった戦後のマイノリティの視点を通して描き出し、人類とその未来を覆う核の「闇」は、人間の心の闇、権力の闇に通じていることを示唆する。

広島を原点とする核時代の「悲劇」にグローバルな視点を接続するこれらの作品は、地球規模の広がりを見せる核被害への意識の喚起と、そのリスク回避へ向けた連帯としてのコスモポリタニズムを胚胎させていることを明らかにした。これらの作品は、グローバルなリスクに捕らわれた我々が、ベックの言う「逃げ出すことのできないようなグローバルな責任の連関」のなかに、人種的、国家的境界を越えた協働の在り方を模索し、大きな家族としての「ひとつの世界」を見出そうとする物語なのである。

本研究を通して考察した英語圏と日本の核をめぐる作品群は、国家、民族、文化などの「越境」に特徴づけられ、私たちが直面する核文明を乗り越えるためには、G・C・スピヴァクが提唱するような「惑星思考」という「他性に根ざした心的装置」が必要であることを示唆している。核兵器の廃絶はもちろん、原発の問題をも包括的に捉える核批評は、国家間の対立や人間の営みだけではな

く、自然環境や地球そのものを視野に入れた文字通り「惑星思考」に基づくものでなければならぬだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕 (計 1 件)

一谷 智子「オーストラリア文学にみる核の表象とエコ・コスモポリタニズム」『エコクリティシズム・レビュー』第 10 号 (2017 年)、35-46 頁 (査読付)

〔学会発表〕 (計 3 件)

- ① 一谷 智子「越境するヒバクシャークローバルリスクと文学的想像力」、西南学院大学公開講座「越境することば、移動する文学」(西南学院大学コミュニティーセンター) 2016 年 11 月 22 日
- ② 一谷 智子「<クロス・エスニックの文学とエコクリティシズム>オーストラリア文学にみる核の表象とエコ・コスモポリタニズム—先住民演劇『ナパジ・ナパジ』をめぐって」エコクリティシズム研究学会・多民族研究学会合同大会シンポジウム、(於：大東文化大学) 2016 年 8 月 6 日
- ③ Tomoko Ichitani “Nuclear Families: The Global Environmental Imagination in Marie Clements’s *Burning Vision* and Trevor Jamieson’s *Ngapartji Ngapartji*,” The 2015 ASLE (Association for the Study of Literature and Environment) Conference (アメリカ合衆国アイダホ州アイダホ大学) 2015 年 6 月 24 日

〔図書〕 (計 4 件)

- ① 一谷 智子「燃えゆく世界の未来図—マリー・クレメンツの劇作にみるグローバルな環境的想像力」エコクリティシズム研究学会編『エコクリティシズムの波を越えて』(共著)、音羽書房鶴見書店、2017 年、384-400 頁
- ② 一谷 智子「オーストラリアの大いなる沈黙」を超えて—ケイト・グレンヴィルの『闇の河』にみる翻訳と文化的記憶」三神和子編『オーストラリア・ニュージーランド文学論集』(共著)、彩流社、2017 年、19-48 頁
- ③ 一谷 智子「核時代の到来を予言した作家—H. G. ウェルズ『解放された世界』からヒロシマへ」、津久井良充・市川薫編『架空の国に起きる不思議な戦争—戦場の傷とともに生きる兵士たち』(共著) 開文社出版、2017 年、183-212 頁
- ④ 一谷 智子「核と帝国主義—オーストラリア先住民演劇『ナパジ・ナパジ』」、

江藤秀一編『帝国と文化—シェークスピアからアントニオ・ネグリまで』(共著) 春風社、2016 年、144-168 頁

〔その他〕

書評

一谷 智子「クリストス・チョルカス著『スラップ (オーストラリア現代文学傑作選)』」、オーストラリア研究第 30 号 (2017 年)、103-106 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

一谷 智子 (TOMOKO ICHITANI)

西南学院大学文学部英文学科・教授

研究者番号：70466647